

〔研究ノート〕

『圓仁三藏供奉入唐請益往返傳記』  
諸本雜考及び注釈

王 勇

諸本雜考

入唐僧円仁（794-864）は、俗姓を壬生氏と称し、下野都賀郡の人である。十五歳のころ、日本に天台宗を開いた最澄に師事し、弘仁七年（816）に具足戒を受け、承和五年（838）に入唐を果たした。足かけ十年、中国各地を求法巡礼し、承和十四年（847）に帰国、多くの典籍を請来した。比叡山に総持院や常行三昧堂を建立し、斉衡元年（854）三代目の天台座主に任ぜられ、朝野の崇信を一身に集めた。貞観六年（864）圓寂して二年後、日本初の大師号として「慈覚大師」の謚号を贈られた。

円仁がみずから入唐の経歴を克明に書き記した『入唐求法巡礼行記』四巻は、マルコポーロの『東方見聞録』、玄奘三蔵の『大唐西域記』とともに、世界三大旅行記の一つとして衆目を集めている。

ところが、円仁の帰国にしたがって来日した唐人楽師の撰した『圓仁三藏供奉入唐請益往返傳記』はあまり知られていない。この円仁伝記は、巻末の日付によれば、承和十四年（847）十一月二日に撰上したもので、同十二月十四日に筆を止めた『入唐求法巡礼行記』より一か月ほど成立が早い最古の円仁伝ともいえる。

一、諸本の系譜について

『圓仁三藏供奉入唐請益往返傳記』はわずか1300字余りの短編ではあるが、『入唐求法巡礼行記』と内容的に相補い、また唐人の目から見た円仁という希少価値もあり、円仁研究における第一級の史料のみならず、唐代の政治・外交・文化・宗教・風俗な

どを知る上でも貴重な文献である。

岩波書店刊『国書総目録』を調べると、『慈覺大師入唐往返傳』の項があり、形態は一冊本、著者は樂部、成立は承和十四年とあり、別名として『慈覺大師入唐往返傳記』と『入唐往返傳記』が挙げられている。同書は現存する伝本については、以下のものを列挙している。

写本類：明徳院無動寺本（文化十年、真超写）

明徳院無動寺本（文政十一年、豪実写）

来迎院如来蔵本（書写年不明）

版本類：実蔵坊真如蔵本（文久二年）

明徳院本（文久二年）

活字本：大日本仏教全書本（「遊方伝叢書」一）

『国書総目録』はそれとは別に、『圓仁三藏供奉入唐請益往返傳記』の一項を立て、著者は「樂部撰、慈本注」、成立は文政五年（1822）、流布本として「大日本仏教全書」本（「天台霞標」一）を挙げている。後述するように、『圓仁三藏供奉入唐請益往返傳記』は慈本が『慈覺大師入唐往返傳』に注記を加えたもので、別本ではない。

樂部の撰した円仁伝記の諸本としては、真超写本と慈本注本の依拠した魚山如来蔵の古写本はもっとも古く、文化十年（1813）の真超写本と文政五年（1822）の慈本注本はそれに次ぎ、文政十一年（1828）の豪実写本そして文久二年（1862）の柳枝軒木版本（実蔵坊真如蔵本と明徳院蔵本）と「天台霞標」本を経て、「大日本仏教全書」（1912 - 1936）に収録される「遊方伝叢書」本に至る。

明徳院無動寺所蔵の写本二種はそれぞれ真超（1813年）と豪実（1828年）とによって写されたものだが、真超は文政五年（1822）より以後、名を豪実に改めたため、実は同一人物による書写で、豪実写本は真超写本の再治本（訂正版）ということになる。実蔵坊真如蔵版本と明徳院蔵版本は文久二年（1862）柳枝軒木版本の同版、文政五年（1822）の慈本注本を翻刻したものである。また「遊方伝叢書」本は柳枝軒木版本を、「天台霞標」本は慈本注本を、それぞれ底本にしている。そして、慈本注本は

真超写本（1813年）の校勘本で、真超写本はまた魚山如来蔵本を書写したものであるから、つまるところ、現存諸本はひとしく魚山如来蔵本の系統から出ていることがわかる。以上を整理すると、次のような系譜図になる。

「天台霞標」本（1862）

魚山如来蔵本 真超写本（1813） 慈本注本（1822） 柳枝軒木版本（1862） 「遊方伝叢書」本  
豪実写本（1828）

以下は右の系譜図にそって、魚山如来蔵本・真超写本・慈本注本（含「明德院蔵版本」、「遊方伝叢書」本）・「天台霞標」本を考察してみる。

## 二、魚山如来蔵の古写本

ところで、京都来迎院の如来蔵本は『国書総目録』によって書写年不明とされるが、それが前述のとおり真超写本と慈本注本が依拠した魚山如来蔵の古写本にあたる可能性がきわめて高いと考えられる。

つまり、来迎院は魚山という山号を持ち、日本音楽の源流といわれる声明の発祥地で、仁寿年間（851～854）円仁が声明の修練道場として開山したと伝えられる。如来蔵が魚山から来迎院へと改名した経緯や時期は不明だが、唐人の撰した円仁伝記がここに伝来したのは、決して偶然ではないと思われる。

来迎院の如来蔵について、東京大学史料編纂所はすでに一九五八年から調査をはじめ、一九七四年に資料撮影を終了し、『来迎院如来蔵聖教』として写真帳を作成した。東京大学史料編纂所のホームページには、以下のようなデータが公表されている。

(<http://www.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/shipscontroller>)

【書目ID】 00028547

【史料種別】 写真帳（日本語）

【請求記号】 6170.62-2

【書名】 来迎院如来蔵聖教

【著者名】

【原蔵者】 来迎院(京都市左京区)

【出版事項】撮影：1958-1974 引伸：1964-1975

【形態】 17冊

【大きさ】 21×31cm(洋)

【注記】 『来迎院如来蔵聖教文書類目録』(RS1070-258) 参照

ところで、『来迎院如来蔵聖教文書類目録』によれば、『慈覺大師入唐往返傳記』は平安時代末期の成立とされるが、一九七二年五月に小野勝年氏は龍谷大学の院生中田篤郎君と森栄司君を連れて、京都左京区にある来迎院を尋ね、如来蔵の原写本を調査した結果、鎌倉時代に書写したものと推定した。以下、小野勝年氏の所見を引用しておく。

来迎院の如来蔵は三個の檜櫃に納められた聖教類で、魚山の関係から声明類などの貴重資料があり、すでに史料編纂所の調査目録などもでき、また渋谷亮泰「天台書籍総合目録」も利用している。この蔵の由来については別にその人の示教に俟たねばならないが、目的のものは櫃の底の方から捜しだすことができた。

縦一七センチ横一五センチ、紙質は未詳であるが、一見麻紙のように見える白紙で、表紙と本文と合せて十丁からなる粘葉装の小冊子である。ところどころ虫も蝕っている。表紙の左肩に「慈覺大師入唐往反傳記 青龍蔵」とあり、本文はヘラ描きによる七行の罫線内に、毎行十二字前後、楷書体で書き、巻頭に「圓仁三藏供奉入唐請益往返傳記」、末尾に「以上戒心之本交合了」とある。

右のような所見に基づいて、小野勝年氏は「要するに抄本の年代については、冊子の体裁、書体などからみて、鎌倉時代のものとして解して恐らく大過ないのではあるまいか」と推定する。

巻末の「以上戒心之本交合了」について、小野勝年氏は「戒心のことは未詳である

が、『以上は戒心の本、交合し了りぬ』といい、彼の所蔵本を抄写したのみで、別に対校本を使用した様子はない」と理解している。しかし、読み方によっては「以上、戒心の本をもって交合し了りぬ」とも取れるし、「交合（校合）」という以上は別本が存在していた可能性を排除しがたい。

この問題は後考を俟つことにして、戒心という人物は如来蔵写本の書写年代を推定するために重要な手がかりとなる。愚意では、ここに出てきた戒心は、おそらく藤原隆信その人ではなかろうかと考える。

藤原隆信（1142～1205年）は歌人または画家として活躍し、特に肖像画に堪能で、京都神護寺蔵の伝源頼朝像・伝平重盛像は隆信作と伝わる。また後白河法皇の命によって、法然上人の肖像を描いている（知恩院蔵「隆信の御影」）。この肖像執筆が縁となって、建仁元年（1201）法然上人を戒師として出家し、戒心と号した。

そうすると、如来蔵写本の書き手が「交合」に用いた「戒心之本」は、戒心が書写したならば、1201～1205年に成立したものということになる。もし戒心の所蔵本ならば、年代はさらに遡れる。したがって、『来迎院如来蔵聖教文書類目録』の平安時代末期説が成り立たず、小野勝年氏の鎌倉時代説はより合理的であろう。

### 三、真超写本について

筆者は「大日本仏教全書」収録の二本によって、始めてこの伝記に注目したが、右の来迎院如来蔵の写本を睹る機会に恵まれず、ただ長年の畏友だった野本覚成氏を通して、幸いにも真超写本と豪実写本それに明徳院版本の複製本を入手できた。

以下、書写年の明らかな写本のうち、もっとも古い真超写本（1813）について、いささか所見を述べる。

これは縦17センチと横14.8センチの冊子本で、如来蔵写本とほぼ体裁を同じくしている。本文は漢字のみ墨書で写され、訓点類（返り点や送り仮名など）は朱筆で書き入れている。また欄外には、多色筆によって記入された注記が随所に見られる。

表紙の右肩に「癸第十」とあり、その下に「山門無動寺蔵」の長方印が捺されている。そして真ん中に「慈覺大師入唐往反傳記 青龍藏」と書かれている。扉紙は「山

門無動寺藏」と「沙門真超」の印、そして「慈覺大師入唐往反傳記」と「慈覺大師入唐往反傳記 青龍藏」の墨書と列ねる。

本文は如来蔵写本を忠実に写しているらしく、一葉七行、每行十二字前後、楷書体で書かれている。巻頭の内題は「圓仁三藏供奉入唐請益往返傳記」に作り、小野勝年論文の掲載写真に照らすと、「返」を「反」に誤写しているが、それ以下の本文は行数や字数のみならず、欠字や空白まで原写本の体裁を守っている。

欄外には誤字の訂正や語句の校勘そして内容の考証といった注記がほぼすべてのページにわたっている。書者の博学ぶりと苦心のほどをうかがわせる。巻末には小野勝年録文には見えないが、「以上戒心之本交合了」の上に原本の文字として「秘也」の墨書二文字が写されている。

裏書は二葉にわたって、以下の数文が書かれている。順にしたがって掲出する。  
(通し番号は筆者)

(1) 文化十年癸酉秋八月魚山如来蔵

古記借用之令書寫之希代珍書也

台嶽法曼院大僧都眞超

(2) 同十一年戌三月十七日於里坊校合了

(3) 卷中字義不可解者傍加

以俟後正 虛堂句讀

文化十二年四月晦

(4) 文政五年秋八月為

超僧正囑聊正焉馬之誤分以 印

祝希烈識

(1) は眞超の筆で、文化十年(1813)八月に魚山如来蔵の古記を借りて書写させ、

「希代珍書也」と感嘆したことを記している。その時、真超は法曼院大僧都だった。

(2)も真超の書き添えで、その翌年(1814)三月十七日、里坊において写本を校合したという。校合には、誰かに謄写させたものを自ら対校したのか、それとも「魚山如来蔵古記」以外の別本を用いたのだろうか、想像を膨らませる。ちなみにこの年の干支は「甲戌」が正しい。

(3)はさらにその翌年(1815)四月末に、「虚堂」(「虚」は「虚」の異体字)という人物が句読を施し、字義不明のところに印をつけたことを示している。虚堂の経歴は詳らかでないが、慈本注本の跋文に「(文化)十二年夏四月禪林實融僧正句讀」とあり、「實融僧正」と同一人物であろう。「禪林」とあるから、禅宗の僧侶である。

(4)は祝希烈の識語で、文政五年(1822)八月に真超の依頼を受けて、写本の字句校勘をしたという。祝希烈の記入は印で示されているので、写本を調べたところ、かなり多く見つかる。この時点で、真超はすでに僧正に昇格しているが、名を豪実に改めていない。祝希烈(1785~1863年)は神官の家門の出で、天保七年(1836)四月六日に従三位に叙せられて日吉社司になった。

以上述べてきたように、真超は如来蔵写本を「希代珍書」として讃え、その書写と校勘に精魂を傾けていた。禅僧の虚堂実融と神官の祝希烈にまで句読と校正を依頼したことは、その人脈の広さを推して知るべし。

また、慈本注本の跋文に「真超僧正又就『大師別傳』及『續日本後紀』而校、更囑慈本訂正之。慈本與希烈宿禰俱補缺脱、畧加譯注」とみえ、慈本も真超よりこうした訂正校勘の作業に誘われたことを知る。そして同じ文政五年八月に完成した慈本注本は、その成果を生かしたものであるに違いない。

#### 四、慈本注本について

前節にふれたように、文政五年(1822)八月、祝希烈はすでに僧正になった真超から囑託され、真超写本の「焉馬之誤」を正した。その訂正箇所は印で示されているので、今でも容易に見出すことができる。その多量さとの確さよりして、本格的な校勘作業だったことが想像される。

真超写本の跋文識語には出ていないが、慈本もこの作業にかかわっていた。その成果を真超写本に書き入れたかどうか明らかでないが、同じ時期に慈本注本が出来あがっている。その巻末には「文政五年秋八月」の日付を持つ慈本識語が記されている。

魚山如来藏中、有唐樂郤所撰『慈覺大師入唐往返傳』者、蓋希世之珍也。惜哉、蠹蝕縱橫、殆不可讀焉。文化十年秋八月、法曼眞超僧正謄寫<sup>眞超後改</sup>。十二年夏四月、禪林實融僧正句讀。眞超僧正又就『大師別傳』及『續日本後紀』而校、更囑慈本訂正之。慈本與希烈宿禰俱補缺脱、畧加譯注。固無別本可以校證、則闕其疑者而俟後正耳。

文政五年秋八月

羅溪沙門慈本記

右によれば、文化十二年（1815）四月に実融僧正（虚堂）が句読を加えてから、真超はさらに『大師別傳』や『続日本後紀』などを用いて写本を校正したのである。そして、慈本にも訂正を依頼した。文政五年（1822）八月、慈本と祝希烈（希烈宿禰）がともに脱文を補い、注釈を加えたが、「固無別本可以校證」といった状況で、なおも疑問点を存して後考を俟つことにしたという。この語気より推せば、慈本が真超写本の底本だった如来蔵写本を寓目しなかったことは明らかである。

ところで、慈本注本の原本はすでに散逸したと思われるが、文久二年（1862）の柳枝軒木版本と「天台霞標」本にその面影をとどめている。『国書総目録』によれば、文久二年の木版本は実蔵坊真如蔵と明徳院に所蔵されている。手元の明徳院版本に基づいて、概略を紹介しておく。

巻頭に「慈覺大師入唐往返傳」とあり、行を改めて二マス下げて「圓仁三藏供奉入唐請益往返<sup>往返通</sup>傳記」が続く。本文は八葉あり、毎葉十行、毎行二十字、注記はすべて枠付の双行割注となる。巻末は底本の「秘也 以上戒心之本交合了」とある一行を欠く。慈本自跋に続いて、下記の刊記が刻まれている。

慈覺大師一千年御忌、以羅溪大僧都校訂之本刻之

文久二年歲次壬戌 十月 台宗書房 京師柳枝軒方行



京都の書肆である柳枝軒は慈覚大師円仁の千年遠忌を記念して、文久二年（1862）十月に慈本の校訂本を上梓したのである。ちなみに、『国書総目録』に活字本として挙げられている「遊方伝叢書」本は、慈本自跋に続いて同様の刊記を有することから、柳枝軒木版本に依拠し、つまり慈本注本 柳枝軒木版本（明徳院版本） 「遊方伝叢書」本という流れになるわけである。

## 五、「天台霞標」本について

同じく「大日本仏教全書」に収録された「天台霞標」本は、「遊方伝叢書」本とやや異なる。二本とも慈本自跋を巻末に付してはいるが、「天台霞標」本にある「文政五年秋八月」の日付は「遊方伝叢書」本になく、「遊方伝叢書」本にある「文久二年歳次壬戌十月云々」の刊記は「天台霞標」本に見当たらない。つまり、「天台霞標」本は文久二年の柳枝軒木版本を祖本にしていなかったということである。

「天台霞標」は金龍敬雄（1713～1782年）によって編まれ、明和八年（1771）正月に上中下の三巻なるが、文久二年（1862）十月に慈本はこれを四巻に増補して初編とし、さらに他の遺文を集めて七編まで完成させた。その四編巻之二に自注本の『圓仁三藏供奉入唐請益往反傳記』を納めている。

以上のように、「天台霞標」本は明徳院版本と同じく文久二年十月になったものだが、「天台霞標」本の編者および刊者は底本作者本人であるため、第三者によって上梓した柳枝軒木版本（明徳院版本）より、慈本の本意をもっと忠実に示したはずである。二書の相違をいくつか挙げよう。

「天台霞標」本は巻頭の題名「慈覚大師入唐往返傳」を省き、文字の考証など確定した割注を直接本文に書き換えている。たとえば、「悪愍」に対して柳枝軒木版本に「愍或作愍、俗殺字」と割注があるが、「天台霞標」本はそれを省いて、本文を「悪殺」に書き直している。

慈本（1795～1869年）は伊勢の人、字を泰初といい、号して羅溪または水月道場という。最初は比叡山に登り天台を学んだ後、西塔無量寿院に住錫して博学の名を世に

高めた。天保年中（1830～1844年）妙法院教仁法親王の招きを受け、上京して洛東渋谷に庵を結び、のちに松尾の明寿院に隠栖したが、七十五歳の高齢をもって台麓の十妙院別房において入寂した。

この博聞強記の学僧が唐人樂邵の撰した『圓仁三藏供奉入唐請益往返傳記』へ傾けた情熱は、真超に勝るとも劣らない。

## 六、伝記の題名について

現存諸本はすでに述べたとおり、同じく来迎院（魚山）如来蔵写本の系統から出たものだが、ただし各本の題名は必ずしも一致していない。

まずは『国書総目録』が『慈覺大師入唐往返傳』と『圓仁三藏供奉入唐請益往返傳記』を二種類の本として別々に扱うのは妥当ではない。「遊方伝叢書」本と「天台霞標」本は題名こそ異なるが、慈本の跋語をともに有し、同じく慈本注本の流れを汲んだことは間違いない。異名異版同本とでもいえようか。

つぎに、異名同本ならば、どちらの題名が正しいかが問題となってくる。現存諸本のうち、『圓仁三藏供奉入唐請益往返傳記』とする「天台霞標」本を除いて、他はすべて『慈覺大師入唐往返傳』（柳枝軒木版本）か『慈覺大師入唐往反傳記』（真超写本など）となっている。しかし、これらはいわゆる外題で、各本巻頭の内題は『圓仁三藏供奉入唐請益往返傳記』（「返」は「反」にも作る）に一致している。

思うに、「慈覺大師」というのは、円仁が貞觀六年（864）亡くなって、その二年後に生前の業績を称えられ、日本初めての大師号として贈られた謚号であり、樂邵が円仁の生前に書いた伝記にこのような題名をつけることはありえない。したがって、正しい題名は『圓仁三藏供奉入唐請益往返傳記』とすべきであろう。

## 注釈

本伝記の先行研究として、もっとも詳しいのは、来迎院如来蔵の写本を翻字し、それに簡単な語釈をつけ、さらに和訳した小野勝年氏の「『圓仁三蔵供奉入唐請益往返傳記』について」である。中国では、顧承甫氏はごく簡単に『慈覺大師入唐往返伝』の存在を紹介した。また筆者も『円仁三蔵供奉入唐請益往返伝記』の翻字と注釈を公表したことがある。

本稿は前稿をベースにして、より詳しい注釈を試みたものである。翻字にあたっては、真超写本（1813年）を底本に用い、豪実写本（1828年）と明德院版本（1862年）そして「天台霞標」本（1862年）と如来蔵写本によった小野勝年録文をもって校合した。

[外題] 慈覺大師入唐往反傳記

青龍藏

[内題] 圓仁三蔵供奉入唐請益往反<sup>[1]</sup>傳記

### 【注釈】

[1] 往反：小野勝年録文は「往返」に作る。底本は「返：『説文』還也。『玉篇』復也。『韻會』通作反。府遠切」と頭注をつけている。ここで「返」は正字、「反」は仮借字、どちらも「へん」と訓む。

且夫地雖沃壤、非播種而田則荒。百穀用成<sup>[1]</sup>、非陽和<sup>[2]</sup>而苗不實。竊聞日本政化、人一其心。苟非宿植善緣、必是<sup>[3]</sup>多生幸會。好生惡煞<sup>[4]</sup>、豈止公侯。崇善修文、達于士庶。雖專佛理、祇得升堂<sup>[5]</sup>。數百年來、衣珠<sup>[6]</sup>未啓。每居火宅<sup>[7]</sup>、焉知外有三車<sup>[8]</sup>。逃逝雖還、豈測家藏七寶<sup>[9]</sup>。

### 【注釈】

[1] 百穀用成：『尚書注疏』（卷十一）漢孔氏傳に「歲月日時無易。傳：各順常、百穀用成」とあり、[宋]袁燮『絜齋家塾書鈔』（卷九）：「順氣成象、則百穀用成。逆氣成象、則百穀用不成」と見え、帝王の徳政により、風雨順調にして五穀豊作という意味に用いられることが多い。「穀」は明德院版本も「天台霞標」本も「穀」に作るが、「穀」の俗字である。

[2] 陽和：春の陽氣、日光が程よく調和している様子、気温が適切であること。

- [3] 苟非……必是：「天台霞標」本は「必是」を「寧得」に作る。「苟非」と「孰能」(または「焉得」、「何能」、「何以」、「何由」、「豈能」、「誰能」、「安能」等との連用は、前項を条件として後項の結果を生むことを意味する。ただし、「苟非」にはもう一つ、二者択一の用法がある。すなわち「Aでなければ、Bである。」たとえば、『魏書』(卷八・世宗宣武帝紀)に「苟非稱要、悉從蠲省」とあり、『周書』(卷三十五・薛瑞傳)に「設官分職、本康時務。苟非其人、不如曠職」と記されている。このように見てくると、「苟非」と「必是」の連用は文法上、なんら不都合はなく、「苟も宿植の善縁に非ずんば、必ずや是れ多生の幸會なり」という意味に解される。
- [4] 惡煞：小野勝年録文は「惡縁殺」とある。「縁」は衍字である。「煞」は、「天台霞標」本は「殺」に作り、明徳院版本は「煞」として「煞或作煞、俗殺字」と割注している。ただし、唐の顔元孫撰『干祿字書』によれば、「煞」は俗字、「殺」は正字とされる。
- [5] 祇得升堂：明徳院版本と「天台霞標」本は「祇」を「稍」に作る。「祇」は「僅」または「唯」と解される。「升堂」について、小野勝年録文は「高位」と解釈するが、それは当たらない。『論語』の「由也升堂矣、未入於室也」について、皇侃疏は「窗戸之外曰堂、窗戸之内曰室。孔子言子路為弟子、才徳已大、雖未親入我室、亦已登升我堂、未易可輕慢也」と説明している。諺に「登堂入室」とあるとおり、親炙直伝を意味する「入室」に対して、「升堂」はその前段階、つまり学問の世界では初級的な段階に止まるといった意味であろう。「佛理を専らにすと雖も、ただ升堂を得るのみ」と訳しておく。
- [6] 衣珠：明徳院版本と「天台霞標」本は「衣鉢」に作るが、採らない。「衣珠」は法華七喩の一つとしてよく知られる。すなわち『法華經』(五百弟子受記品)に「譬如有人至親友家、醉酒而臥。是時、親友官事當行、以無價寶珠繫其衣裏、與之而去。其人醉臥都不覺知、起已、遊行到於他國。為衣食故、勤力求索、甚大艱難。若少有所得、便以為足。於後、親友會遇見之、而作是言：『咄哉、丈夫！何為衣食乃至如是？我昔欲令汝得安樂、五欲自恣、於某年月、以無價寶繫汝衣裏。今故現在、而汝不知。勤苦憂惱、以求自活、甚為癡也。汝今可以此寶貿易所須、常可如意、無所乏短』」と述べられている。わが身に佛種の善根を受けていながらも混沌として察知しないという意味である。『法藏碎金録』(卷五)は、杜牧の詩句「睫在眼前長不見、道非身外更何求」を引いて「この二句、佛書中の衣珠の意に類似している」と指摘している。
- [7] 火宅：苦難に満ちる俗世によく喩えられる。詳しくは「三車」の注を参照されたい。
- [8] 三車：三乗のこと。『法華經』(譬喩品)に出典するが、大意は以下のようである。ある長者は家宅が火災に見舞われているのに、幼い子供たちが遊びに熱中して脱出しようとしなかったため、羊車・鹿車・牛車の三車をもって子供たちを火宅から誘い出したという。ここで、「火宅」は苦難に満ちる俗世を喩え、三車は順次に声聞乘(小乗)と縁覺乘(中乗)そして菩薩乘(大乘)をさす。
- [9] 七寶：七つの宝物。仏經によって異なるが、『法華經』(授記品)は金・銀・琉璃・磲磔・瑪瑙・真珠・玫瑰を挙げている。

會以今上<sup>[1]</sup>初登九五<sup>[2]</sup>、尤務善門。為欲度脱於有情、遂敷<sup>[3]</sup>漢明之故事<sup>[4]</sup>。迺馳心國內、游想雲林<sup>[5]</sup>。散覓<sup>[6]</sup>辯惠<sup>[7]</sup>高僧、旁求多聞<sup>[8]</sup>大徳。故知時雨將降、山川出雲。

嗜欲將至、有開必先<sup>[9]</sup>。

【注釈】

- [1] 今：唐人にして「今上」と称するのは唐の会昌六年（846）三月に即位し、武宗滅仏の政策を一変して仏教を奨励した宣宗（李忱）のことしか考えられないが、楽邵がこの伝記を承和十四年（847）に撰して日本の朝廷に呈上することを考慮し、また後文にも天皇のことを「上」や「綸言」と称し、さらに一貫して日本の年号を使用していることから、仁明天皇（在位833～849年）をさす可能性が高い。
- [2] 九五：『易』に出る卦爻の位名。『易・乾』の「九五、飛龍在天、利見大人」に対して、孔穎達は「言九五、陽氣盛至于天、故云『飛龍在天』。此自然之象、猶若聖人有龍德、飛騰而居天位」と説明している。後世では、「九五」をもって帝位に喩えられる。
- [3] 敷：小野勝年録文は「敷」とし、明徳院版本と「天台霞標」本は「效」に作る。底本も「效」を傍注している。[遼]釋行均『龍龕手鑑』（巻一）に「敷：胡教反、學也。考也。成也」とある。また『康熙字典』（巻十二）に「敷：『廣韻』胡教切、『集韻』後教切、『韻會』後學切。並音效。『説文』覺悟也。篆省作學。『玉篇』教也。（中略）又『集韻』轄覺切、音學、義同『韻會』學字。（中略）按『古文尚書』學皆作敷」と見え、「效」よりも「學」の古字と見るべきである。
- [4] 漢明之故事：「漢明」とは「漢の明帝」の略。[晉]袁巨集『後漢紀』によれば、東漢の明帝劉莊（在位57～75年）は夜に金人を夢み、群臣に問うと、「仏」という。明帝は郎中蔡愔を天竺に遣わして仏法を求め、沙門の攝摩騰と竺法蘭を得、白馬に仏經を負わせて帰国、これをもって中国における仏教初伝とされる。
- [5] 雲林：俗世を離れた仏教界のこと。
- [6] 散覓：「散」は「散らかす」「広げる」「開く」の義。ここでは「覓」を修飾する副詞として「広く」の意味に取れる。後続の「旁求」と対句をなす。底本は「敢力」と頭注しているが、採らない。
- [7] 辯惠：聡明にして弁舌が立つこと。底本をはじめ、明徳院版本と「天台霞標」本はみな「辨惠」に誤る。豪実写本と小野勝年録文に従う。
- [8] 多聞：梵語bahu-s/rutaの訳語。博聞強記にして仏理に精通すること。『異部宗輪論』は「廣誦衆經、善持佛語諸經」の者を仏弟子四衆中の「多聞衆」とする。釈迦の十大弟子のうち、阿難尊者は多聞第一とされる。
- [9] 時雨將降、山川出雲。嗜欲將至、有開必先：『禮記・孔子閒居』に「清明在躬、氣志如神。耆欲將至、有開必先。天降時雨、山川出雲」と出典がみえる。『禮記注疏』（巻五十一）孔穎達疏は「『正義』曰：此一節明周之文武之德。清明在躬者、清謂清静、明謂顯著、言聖人清静光明之德在於躬身。氣志如神者、氣志變化微妙如神、謂文武也。耆欲將至者、耆欲謂王位也。王位是聖人所貪、故云耆欲。方欲王天下、故云將至。有開必先者、言聖人欲王天下、有神開道、必先豫為生賢知之輔佐。天降時雨山川出雲者、此譬其事猶如天將降時雨、山川先為之出雲、言文武將王之時豫生賢佐」と解釈している。案ずるに、「嗜」は「耆」に通じる。『禮記』注本では「耆」と「嗜」の混用が見られる。「開」は諸本とも「聞」に作るが、小野勝年録文のみ「開」とする。ただし、小野勝年氏は「開は聞の誤りであろう。有聞に改むべし」と考証している。蛇足である。ちなみに、小野勝年氏はこの一文を「めぐみの雨がまさに降ろうとして、山川は雲を出し、嗜欲が至ろうとして、有聞が必らず先だつがごときを知る」と和

訳している。原文の意味を把握していないらしい。

上迺專意揣求<sup>[1]</sup>、果獲圓仁大徳。聖意以本國<sup>[2]</sup>賢良善根、已因多劫。惛惛<sup>[3]</sup>衆庶、非釋教厥<sup>[4]</sup>道轉<sup>[5]</sup>迷。欲以無上善縁、救度沉淪群品<sup>[6]</sup>。是以盱食<sup>[7]</sup>思弘至道、宵衣願達深微。緬思五印土中、法<sup>[8]</sup>與支那不異。邀師爲國、西詣大唐。求思大<sup>[9]</sup>之旨言<sup>[10]</sup>、究六祖<sup>[11]</sup>之妙義。將還此國、普潤群生。勿憚罷音疲勞<sup>[12]</sup>、迺心缺望<sup>[13]</sup>。

#### 【注釈】

- [1] 揣求：底本をはじめ明德院版本と「天台霞標」本に「揣：量也。度也」との割注がある。ここでは、「求」との連用で、「捜す」「探る」の義。[宋]徐夢莘『三朝北盟會編』（卷九十八）に「二人至中京、伺候二聖動靜、恭請道君宸翰、密數金人虛實、揣求探報、知其情狀」とあるのはその用例である。
- [2] 本國：ここでは日本をさす。
- [3] 惛惛：底本をはじめ明德院版本と「天台霞標」本は「惛惛：字見『管子・四時篇』、迷忘之義也」との注釈を施している。「惛惛」と同じく、混迷のほか、混乱・喧々囂々の様子にも用いられる。
- [4] 厥：指示代名詞、「此」「其」の義。明德院版本と「天台霞標」本は「厥」の前に「則」を補う。
- [5] 轉：副詞、「愈」「更」の義。
- [6] 群品：小野勝年録文は「郡群品」に作る。「郡」は衍字。「品」には「衆」の意味があり、「品物」は万物、「品人」は群衆、「品臣」は衆臣をそれぞれ指すように、「群品」は仏教用語として「群類」「群生」に通じ、芸芸衆生を表わす。
- [7] 盱食：底本は「肝」に「盱力」を傍注し、小野勝年録文は「胆」に作り、「肝」と「胆」は「盱」の誤りである。「盱食」は後文の「宵衣」と呼応し、宵が更けて食事を取り、夜が明けないうちに起きることを意味し、古代帝王の勤政ぶりを讃えるのに用いられる。唐太宗の『執契靜三邊』詩に「衣宵寢二難、食盱餐三懼」とあるのはその用例。明德院版本と「天台霞標」本は「盱、日晚也。『續日本紀』卷三曰：『日盱忘食、宵分輟寢』」と割注している。
- [8] 法：底本は「注」に作り、「注：恐誤。法」と頭注している。「注」と「法」は字体の類似から魚魯の誤りを招きやすい。「法」が正しいだろう。明德院版本と「天台霞標」本は「迺」に改めるが、根拠は示されていない。
- [9] 思大：思大師の略、即ち中国南北時代の高僧こと慧思（515～577年）をさす。[唐]思託『延曆僧録』などによれば、慧思はのちに日本に生まれ変わって聖徳太子となり、日本天台宗の祖師と崇められたという。
- [10] 旨言：明德院版本と「天台霞標」本は「卓言」に作り、底本と小野勝年録文の注も「卓言」を是とする。しかし写本類はひとしく「旨言」とあり、後句の「妙義」と対句を成して、文意的には支障はない。「旨」は「美」に通じる。『書經傳說彙纂』（卷九）に『集傳』：旨、美也。古人於飲食之美者、必以旨言之、盖有味」とみえる。
- [11] 六祖：「天台霞標」本は「本師稿本注云：『六祖者、荊溪大師也』」と注記している。小野勝年氏は禅宗六祖の恵能に当てる。荊溪大師とは天台宗中興の祖である湛然（711～782年）

のことで、『佛祖統紀』(巻七)の「九祖荊溪尊者湛然、姓威氏、世居晉陵荊溪。時人尊其道、因以爲號」によれば、普通は天台宗の九祖と崇められる。ここでは小野勝年氏の惠能説に従う。

- [12] 罷勞：「罷」について、諸本は「音疲」と注音している。「罷勞」は「勞罷」にも作り、疲勞困憊の様子。『左傳\_昭公十九年』に「今宮室無量、民人日駭、勞罷死轉、忘寢與食、非撫之也」とあり、[唐]杜預は「罷：音皮、本或作疲」と注している。
- [13] 觖望：「觖」は冀うこと、希求の義。底本に「觖：音厥、怨望也」との頭注がある。『後漢書・李通傳論』に「夫天道性命、聖人難言之。況乃億測微隱、倡狂無妄之福。汙滅親宗、以觖一切之功哉」とあり、[唐]李賢は「觖：望也」と注している。

仁供奉徳因本固、惠自天生<sup>[1]</sup>。既受綸言<sup>[2]</sup>、果齋<sup>[3]</sup>宿志。遂於其歳<sup>[4]</sup>、命上足惟政<sup>[5]</sup>而行。囊不貯金、手空持<sup>[6]</sup>錫。東辭日本、西顧大唐。雖歴險涉於滄溟、若嬉游渡於阿耨<sup>[7]</sup>。經行九土<sup>[8]</sup>、登陟五台。聞善靡不參尋、覩經靡不抄覽。或居外府、爲方岳<sup>[9]</sup>欽崇。及處京華、獲帝王瞻仰。

#### 【注釈】

- [1] 生：底本は「上」に作り、「工」と傍注する。明徳院版本と「天台霞標」本は「工」とする。「上」も「工」も落ち着かず、小野勝年録文の「生」に従う。
- [2] 綸言：『禮記・緇衣』に「王言如絲、其出如綸。王言如綸、其出如綽」とあり、帝王の勅令や詔命を意味する。
- [3] 齋：底本と小野勝年録文は「齊」に誤る。明徳院版本と「天台霞標」本の「齋」によって改める。「齋」はもたらすこと、「携」「帶」「持」「抱」「懷」などの義。
- [4] 其歳：円仁は承和五年(838)六月に渡海、七月二日に揚州の海陵縣に辿りついた。この年を指す。
- [5] 惟政：人名、円仁の弟子。明徳院版本と「天台霞標」本は『大師別傳』及『續日本後紀』作『惟正』と考証している。円仁の『入唐求法巡礼行記』にも「惟正」とある。諸本が一致している「惟政」は、中国での通称であろう。類似の例として、道昭 道照、寂昭 寂照、成尋 誠尋などを挙げることができる。
- [6] 持：底本は「特」に誤り、頭注で「持」に訂正している。
- [7] 阿耨：仏教用語、「極微」と意訳され、今は「原子」とも訳される。ここでは「阿耨達池」の略称である。「阿耨達池」は梵語Anavataptaの音訳、意識は「無熱惱池」となる。底本と小野勝年録文は「阿耨」に誤る。明徳院版本と「天台霞標」本にしたがって改める。
- [8] 九土：写本類は「土」を俗字の「土」に作る。「九土」は九州すなわち中国あるいは天下を意味する。[宋]衛湜『禮記集説』(巻三十七)に「異別者、司徒五地之常、職方九土之宜、王制中國四夷之俗。皆司空所辨以居民者也」とある。また『春秋左傳』の「量入脩賦」について、[晉]杜氏は「量九土之所入、而治理其賦税」と注している。
- [9] 方岳：底本と小野勝年録文は「方面」に作る。明徳院版本と「天台霞標」本の「方岳」に従うべし。伝説では堯は羲和の四子に命じて四岳を掌らせ、四伯と称する。のちに州郡の首長を方岳と称するようになる。文中では、地方の長官(太守、刺史)を指し、後文「帝王」と

呼応する。

六年住於資聖<sup>[1]</sup>、旦<sup>[2]</sup>暮公卿繼來。敕使<sup>[3]</sup>內養安存、神有加毗<sup>[3]</sup>雍護<sup>[4]</sup>。至於給舍員郎<sup>[5]</sup>、内官<sup>[6]</sup>高品。在長安再閏<sup>[7]</sup>、討尋頂禮者、内不下百<sup>[8]</sup>。或則持<sup>[9]</sup>香獻果、或有捨施資財。皇帝常饋齋糧<sup>[10]</sup>、至信<sup>[11]</sup>每供衣鉢。彼迺燃金食玉<sup>[12]</sup>、薄福者不可須臾暫居。而供奉常持<sup>[13]</sup>忍辱在心、斷得貪嗔離己。故居桂玉<sup>[14]</sup>、曾不棲遲<sup>[15]</sup>。縱處荒年、豈愁香鉢<sup>[16]</sup>。

### 【注釈】

- [1] 六年住於資聖：底本は「資聖寺在長安」と頭注、明德院版本と「天台霞標」本はさらに『別傳』云：『開成五年八月到長安城、敕住資聖寺、凡住長安六年』と注釈する。『入唐求法巡礼行記』によれば、資聖寺に安置されたのは開成五年（840）八月二十三日のことである。
- [2] 旦：底本と小野勝年録文は「且」に作る。明德院版本と「天台霞標」本によって「旦」に改める。
- [3] 加毗：「毗」は動詞、庇護の義。「毗佐」などの熟語はその用例である。
- [4] 雍護：「雍」は「擁」に通じる。楊雄『甘泉賦』に「定秦時、雍神休」とみえる。「雍護」は「擁護」にも作る。
- [5] 給舍員郎：「給舍」は納言の官、ここでは給事中と中書舍人を合わせた併称だろうか。「員郎」は員外郎の略称である。底本は「給事舍人員外郎」の略と注記しているが、後考を俟つ。
- [6] 内官：ここでは宦官のことを指す。
- [7] 再閏：底本と豪実写本および小野勝年録文は一致しているが、明德院版本と「天台霞標」本は「兩街」に作り、『僧史略』曰：唐文宗開成中、始立左右兩街僧録」と考証している。底本は「閏：恐問」と頭注し、豪実写本は「閏：疑誤。問」と注記する。円仁は開成三年（838）入唐、開成四年（839）一月と會昌元年（841）九月はそれぞれ閏月で、「再閏」とは長安で二回の閏月を経験したことを仄めかし、前文の「六年住於資聖」と呼応する。したがって、「再問」または「兩街」に改める必要はない。
- [8] 内不下百：「内」について、諸本は一致しているが、小野勝年録本は「内は日の誤り」と指摘する。前後の文脈を吟味すれば、長安滞在中に「討尋頂禮者」のうち、「給舍員郎、内官高品」が百人を下らないという意味に理解される。一日に百人をうわまわる訪問客がやってくるということは、かえって不自然である。
- [9] 持：底本は「特」に誤り、頭注で「持」に訂正。
- [10] 齋糧：底本は「齊糧」に誤り、頭注で「齋」に訂正。
- [11] 至信：正真正銘の信仰、『中阿含經』に出典がみえる。ここでは虔誠の信徒をさす。
- [12] 燃金食玉：底本と豪実写本は「玉」を「王」に作る。明德院版本と「天台霞標」本によって改める。「燃金」は金を燃やして照明とすること、「食玉」は玉を研いで食事とすること、奢侈豪華の生活に喩える。〔宋〕王禹偁『小畜集』（巻二十一）に「養高堂垂白之親、備上國燃金



之費。望雲就日、非無戀闕之心。玉粒桂薪、未有住京之計」とある。『周禮注疏』(卷六)の「王齊則共食玉」について、[漢]鄭氏注は「玉是陽精之純者、食之以禦水氣」と述べ、[唐]賈公彦疏は「謂王祭祀之前、散齊七日、致齊三日、是時則共王所食玉屑」と記す。

[13] 持：底本は「特」に誤る。諸本に基づいて改める。

[14] 桂玉：底本は「桂王」に誤り、豪実写本は「桂玉：疑誤。桂土」と考注する。「桂王」も「桂玉」も当たらない。「桂玉」は豊穰富貴の地を指し、転じて京師すなわち長安に譬える。『唐會要』(卷九十一)に「(乾元)二年九月五日詔：京兆無俸料、桂玉之費將何以堪。宜取絳州新錢給冬季料」とあり、[宋]范仲淹『范文正奏議』(卷下)「奏杜杞等充館職」にも「今館閣臣寮率多清貧、僑居桂玉之地、皆求省府諸司職任」とみえる。また[元]陶宗儀『說郛』(卷十四上)は「桂玉」の条を設けて「京師薪如束桂、膏肉如玉、世以桂玉之地為京師」と説明している。

[15] 棲遲：ゆっくり休むこと、安らかに暮らすこと、滞留・棲息・隱居の義。『詩經』に「衡門之下、可以棲遲。泌之洋洋、可以樂飢」と出典がみえる。[宋]朱子『詩經集傳』(卷二)はこれについて「衡門、横木為門也。(中略)棲遲、遊息也。泌、泉水也。洋洋、水流貌。此隱居自樂而無求者之辭、言衡門雖淺陋、然亦可以遊息。泌水雖不可飽、然亦可以玩樂而忘飢也」と解釈している。『淵鑑類函\_隱逸二』(卷二百八十九)に「孫一元、字太初、不知何許人。(中略)嘗西入華、南入衡、又東登岱、又南入吳會。遂棲遲不去」とあるのはその用例である。

[16] 飴：「飯」の俗字。

供奉晝迺逢迎賓客、夜則剖覽修多<sup>[1]</sup>。三藏妙因、一見皆悟。兩街<sup>[2]</sup>大德、五嶽禪僧、盡與<sup>[3]</sup>校量、精窮義理。至于真如秘密<sup>[4]</sup>、玄妙覺心、彼則指<sup>[5]</sup>實喻空、將空喻性。師迺覺有非有、悟性亦空。三乘<sup>[6]</sup>之理備詳、不二之門<sup>[7]</sup>頓得。

#### 【注釈】

[1] 修多：「修多羅」の略、梵語の音訳語。「修妬路」「蘇怛囉」「修單蘭多」などとも書き、仏教の經典を意味する。

[2] 兩街：元来は長安の横街と朱雀大街を併称したもの。横街は北側に宮城、南側に皇城がある。朱雀大街は南北に走り、長安の中軸線にそって城内を貫く。転じて、朝廷の所在地や貴族らの居住地、さらには長安を指すようになった。一方、開成年間(836~840)唐は左右の兩街に僧録を置き、長安における仏教の中心地または仏教の統括機関の所在地との意味も加わる。ここの「兩街」は狭義に左右兩街の僧侶を指したもののか、それとも長安全体の仏教界を汎称したものか。俄かに断定しがたいが、後文の「五嶽禪僧」との連動よりすれば、長安の大徳と地方の禪僧といった汎称の可能性が高いと思われる。

[3] 校：小野勝年録文と「天台霞標」本は「校」に作る。[唐]顔元孫『干祿字書』に「校校：上比校、下校尉」とあり、[宋]郭忠恕『佩觿』(卷上)は「校校：校、古効翻、比校。校、戸教翻、校尉。(中略)張氏『五經文字』皆从木、非也」と指摘する。二字はよく混用されるが、古代では使い分けているし、ここでは「校」がよいであろう。

[4] 秘密：明德院版本は「密」を「蜜」に誤る。

[5] 指：底本は「捐」に作り、「指歟」と頭注する。諸本によって訂正する。

- [6] 三乗：底本に「三業乗」とあるが、「業」は衍字である。  
[7] 不二之門：「不二法門」のこと、仏教では平等にして差異のない唯一の至道を指す。『維摩詰經・入不二法門品』に「如我意者、於一切法、無言無説、無示無識、離諸問答、是爲入不二法門」とある。

既而患有餘地、心鏡<sup>[1]</sup>轉明。智愈衆人、學兼内外。聞善相告、見義必爲。數<sup>[2]</sup>唐言即有梁漢之正音<sup>[3]</sup>、倣梵書乃同<sup>[4]</sup>迦葉之真體<sup>[5]</sup>。言辭俯仰<sup>[6]</sup>、曾不失口於人。禮度謙恭、未常<sup>[7]</sup>慍見<sup>[8]</sup>於客。足可以爲模範、足可教導後來。

### 【注釈】

- [1] 心鏡：仏教では鏡のように清らかな心は世間万象を映し出すことができると説かれる。  
[2] 數：小野勝年録文は「數」に作る。明徳院版本と「天台霞標」本は「數效通。學也。倣也」と注記する。『康熙字典』（卷十二）に「『古文尚書』學皆作數」と見え、「學」の古字と見るべし。  
[3] 梁漢之正音：「梁」は中国の南方、「漢」は中国の北地、「正音」は正しい発音。円仁は入唐後、足かけ十年間、南北各地を遊歴し、中国語を流暢に操られたと思われる。  
[4] 乃：写本類にこの字はなく、底本に「恐脱乃字」の頭注がある。明徳院版本と「天台霞標」本は「迺」に作る。「迺」は「乃」の異体字。「數唐言即有梁漢之正音、倣梵書迺同迦葉之真體」を対句と見れば、「乃」は「即」に対応し、文意はより滑らかになる。  
[5] 迦葉之真體：「迦葉」は「迦葉仏」の略称で、仏経における「過去七仏」中の六番目に当たり、釈迦の前身とされる。仏足石に刻まれた梵文は迦葉の手になったものと伝えられる。『唐大和上東征傳』「其鄞山東南嶺石上、有佛右迹。東北小岩上、復有佛左迹。並長一尺四寸、前闊五寸八分、後闊四寸半、深三寸。千輻輪相、魚印文分明顯示。世傳曰：『迦葉佛之迹也』」とある。円仁は中国語を習得したのみならず、梵語まで正確に書けるようになったという。  
[6] 俯仰：挙手投足のこと、転じて応対や交際の義に用いられる。  
[7] 未常：「常」は「嘗」に通じる。「かつて…ない」のように使われる。  
[8] 慍見：「慍」は怨むこと、憤怒の義。諸本はみな「蘊見」に作る。豪実写本だけは「慍見」とする。底本は「慍見、『論語』出」と頭注、明徳院版本と「天台霞標」本は「蘊慍通」と考証するが、根拠を示していない。出典は『論語・靈公』に「在陳絶糧、從者病、莫能興。子路慍見曰：『君子亦有窮乎。』子曰：『君子固窮、小人窮斯濫矣。』」とみえる。この一文について、[梁]皇侃は「子路慍見者、弟子皆病、無能起者。唯子路剛強、獨能起也。心恨君子行道、乃至如此困乏。故便慍色而見孔子也」と解釈している。

供奉則藝癢思還、帝<sup>[1]</sup>迺懸心萬里。遂令弟子性海<sup>[2]</sup>、賈詔迺歸<sup>[3]</sup>。唐國帝聞、愴然惜別。敕書手詔、數已<sup>[4]</sup>盈箱。制誥<sup>[5]</sup>諸蕃<sup>[6]</sup>、悉令勤仰<sup>[7]</sup>。公侯卿士、雨泪而辭。供奉名僧、若離親戚。門侶朋友<sup>[8]</sup>、无<sup>[9]</sup>不悽然。資聖仁人<sup>[10]</sup>、悉皆流涕。

## 【注釈】

- [1] 帝：後文より判断して、ここは承和十三年（846）のことについて述べているので、「帝」とは仁明天皇のことである。
- [2] 性海：人名、円仁の弟子。明徳院版本と「天台霞標」本は『續日本後紀』（卷十八）承和十五年（八四八）三月乙酉（二十六）条を引いて「天台宗入唐請益僧圓仁將弟子僧性海・惟正等、去年十月駕新羅商船來著鎮西府。是日歸朝、遣中使慰勞、各施御被」と述べる。『入唐求法巡禮行記』の記録を参照すれば、性海は承和十三年（846）唐商李鄰<sub>レ</sub>の船で入唐し、同四月に円仁への書簡を新羅人の王宗に託し、同五月に円仁は王宗を通して性海を呼びつける。同十二月、性海は楚洲にたどり着き、太政官牒と延暦寺牒それに小野恒柯（大宰小弐）の手紙および仁明天皇の賜った黄金などを円仁に手渡す。
- [3] 賁詘<sub>レ</sub>返歸：明徳院版本と「天台霞標」本は「賁」について、『干祿字書』を引いて「賁<sub>レ</sub>：上通下正」と注記し、「返」を「迎」に作る。二字は形義とも類似するが、底本をはじめ写本類に従う。
- [4] 已：「天台霞標」本は「卷」に作り、明徳院版本は「弓」に作る。底本は「已字、卷力弓力」と頭注する。『輟耕録・弓字』に「『弓』即『卷』字」とみえる。「弓」も「弓」も「卷」の異体字である。「數已盈箱」は「その数すでに箱に満つ」の意味だが、「數卷」だけでは「箱に満つ」とは通らない。
- [5] 制誥：文体の一種、天子の詔令をさす。
- [6] 諸蕃：豪実写本は「蕃疑藩」と注記し、さらに「諸藩」は唐の藩鎮を意味すると考証する。この「蕃」は外国を意味するものであろう。
- [7] 勤仰：豪実写本と明徳院版本そして「天台霞標」本はみな「勤作」に作る。底本の「」は「作」にも見えるが、『碑別字新編』に出る「仰」の草書であると確かめられる。ちなみに、小野勝年録文も「仰」に作る。
- [8] 門圃朋友：底本と豪実写本は「門 有友」とし、明<sub>レ</sub>院版本は「門 朋友」とあり、「天台霞標」本は「門 明友」に作る。底本は「門」の下に「恐脱字」と指摘、豪実写本は「有」は「明」の誤りで、「門」の下の脱字を「客」とする。小野勝年録文は「門 有友、 一字脱落、恐らく門弟門下のごときであろう。有友は有朋と同じ」と考証する。この一段は円仁と惜別する人々を挙げ、すなわち「唐國帝」「公侯卿士」「資聖仁人」と並んで、「門 朋友」とは個人的な知友をさすものと推定される。したがって闕字に「侶」を当て、「有」を「朋」に改める。
- [9] 无：「無」の古字。明徳院版本と「天台霞標」本は「無」に作る。
- [10] 資聖仁人：「資」について、底本は頭注で「賢」に訂正するが、蛇足である。資聖寺名也」と頭注する。六年間も世話になった長安資聖寺の僧侶たちが惜別してくれたものである。

以唐會昌五載、離彼長安<sup>[1]</sup>、陸往登州。今歲<sup>[2]</sup>季秋、方帆渡於巨海。不逾十日、已達日源<sup>[3]</sup>。想念因由、事歸道力。兼與大唐<sup>[4]</sup>數客、同載而還。或有志在琴書、或則好游<sup>[5]</sup>山水。其有<sup>[6]</sup>簪纓鼎族<sup>[7]</sup>、或是累世衣冠。或則術比扁秦<sup>[8]</sup>、或有義同管鮑<sup>[9]</sup>。文能備體、武勇<sup>[10]</sup>絕倫。皆受供奉厚恩<sup>[11]</sup>。

【注釈】

- [1] 離彼長安：『入唐求法巡禮行記』（巻四）によれば、円仁らは唐の会昌五年（845）五月に長安を発ったのである。
- [2] 今歳：承和十四年（847）のこと。
- [3] 日源：太陽の源、転じて日の本つまり日本国をさす。明徳院版本と「天台霞標」本はここに下記の割注を入れている。『別傳』曰：大師出京而至登州、與唐客四十餘人同乘船、著太宰府。唐大中元年、而我承和十四年九月也。」
- [4] 大唐：底本と小野勝年録文は「大大唐」に作る。「大」は衍字、「大唐」とすべし。
- [5] 游：明徳院版本と「天台霞標」本は「遊」に作る。
- [6] 其有：明徳院版本と「天台霞標」本は「共是」に作るが、後句の「或是」と齟齬してしまう。底本は一字を空けて、「其下似脱 字」と頭注する。豪実写本は脱字を「徒」と推定する。小野勝年録文の「其有」に従う。
- [7] 簪纓鼎族：「簪纓」は古代高官の冠を飾るもの、転じて大臣貴族をさす。「鼎族」は名門豪族のこと。
- [8] 扁秦：底本と豪実写本は「扁秦」に作るが、明徳院版本と「天台霞標」本および小野勝年録文は「扁倉」とする。また底本は「秦」について頭注で「倉力」と疑う。「扁倉」は古代の名医扁鵲と倉公の併称、転じて名医を汎称する。『周禮』の「可知審用此者、莫若扁鵲・倉公」について、[唐]賈公彦疏に「依『漢書\_藝文志』：大古有岐伯・榆樹、中世有扁鵲・秦和、漢有倉公」とある。扁鵲と倉公は名高い名医であるが、時代的には離れている。扁鵲と同時代の秦和について、[唐]陸徳明の『周禮音義』は「秦和、『左傳』昭元年、晉平公疾。秦伯使醫、和為之、即此人也」と述べる。「扁秦」は周代の扁鵲と秦和の併称で、「扁倉」に改める必要はない。
- [9] 管鮑：春秋時代の管仲と鮑叔牙の併称。二人は断金の交を結んでいるため、後世では摯友に喩えられる。[晉]袁宏『後漢紀』（巻九）に「廉范（中略）與洛陽亭長慶鴻為刎頸之交、時人稱曰：前有管鮑、後有慶廉」とある。
- [10] 武勇：諸本は一致するが、小野勝年録文だけは「武雄」に誤る。
- [11] 厚恩：底本と豪実写本は「原恩」に作る。小野勝年氏は「厚恩。原恩に似たり。敢えて正す」と校勘する。明徳院版本と「天台霞標」本も「厚恩」に作り、従うべし。

供奉愍同骨肉、迺至分衣共煖、減食均食。欲知菩薩化身、即仁供奉大師是也。能令滄溟萬里、平如指掌之塗。兩國雖遙、可比荊吳之近。自離日本、十載大唐<sup>[1]</sup>。遂使一音之義遍聞、甘露之言悉潤<sup>[2]</sup>。今則國異法同、人殊道合<sup>[3]</sup>。豈不因我承和國王、普為兆人<sup>[4]</sup>、勸請<sup>[5]</sup>大師之力也。

【注釈】

- [1] 十載大唐：明徳院版本と「天台霞標」本は「大唐」を「在唐」に作る。小野勝年録文のように「自離日本十載、大唐遂使一音之義遍聞」と句切るのは誤読と誤写を招く。底本は「『十載』下似脱『于茲』二字」と頭注する。豪実写本は二字分を空け、補字について底本とほぼ同様に推定している。この伝記は全体として四六駢体を多用し、四六で句切ると、文意は通りや

すい。また文中には「大唐」を多用しており、「在唐」に改める必要はない。「十載」に関して、明徳院版本と「天台霞標」本は「按『傳』：大師承和五年六月發太宰府、十四年九月還太宰府。往還合十年也」と割り注している。

- [2] 潤：はわずかな残筆しか残らず、判読できない。明徳院版本と「天台霞標」本は「均」を補う。底本は「疑均」とし、豪実写本は「蝕殘遺畫、似均字」と注記する。小野勝年氏は「は字形不詳。遍聞の対句であるから、均または悉のごときかと解される」と指摘する。「遍聞」との対句関係を考えれば、「均」よりも「悉」または「普」のほうが妥当であろう。
- [3] 道：は闕字。底本は「疑合」と頭注する。明徳院版本と「天台霞標」本は「合」を補う。小野勝年氏は「國異法同の対句であるから、合するというような字が脱落している」と推定する。
- [4] 兆人：底本と小野勝年録文は「非人」に作る。豪実写本と明徳院版本などによって「兆人」と正す。
- [5] 勸請：小野勝年録文は「勤請」に作る。この二字は字形上、判別しにくいし、誤写と誤認を招きやすい。

郃望本南陽<sup>[1]</sup>、寓居西蜀。幼常好學、不事生涯<sup>[2]</sup>。應舉無成、思游本國。郃以叔任道州<sup>[3]</sup>刺史、名公文<sup>[4]</sup>。叔任度支員外郎、名坤。伏以鸞索<sup>[5]</sup>之後、顯達亦<sup>[6]</sup>多。或已薨亡、不敢具載。當今榮顯、唯叔父二人。顧已遠地無親、略言本末。欲使他年魚雁、尋知苗裔之由。人信往還、冀有誰何之間。

#### 【注釈】

- [1] 望本南陽：「望」は族望、「南陽」は今の河南省にある。六朝時代は門族を重んじ、その遺風は唐に至っても衰えない。樂郃は西蜀（今四川）に居住しているにもかかわらず、一族の出自なる南陽を忘れていない。
- [2] 生涯：底本は「涯、恐産」と頭注する。豪実写本と明徳院版本などは「生産」に作る。「生涯」は「生計」や「財物」の意味を有する。[宋]高似孫『蟹略』（卷二）「水中蟹」の条に「論功直與酒杯同、何事生涯在水中」と述べられている。また[宋]周密『齊東野語』（卷十四）に「余備歷險阻、拙事生涯」とある用例は「不事生涯」に類似する。
- [3] 道州：底本と小野勝年録文は「道道州」に作り、「道」は衍字、「道州」とすべし。隋の開皇十六年（596）に置かれ、治所は鄆城県（河南省）にある。隋の大業初めに廃され、唐の武徳四年（621）復活する。貞觀元年（627）また廃され、まもなく復旧する。
- [4] 公文：底本は「公父」に作り、「父恐文」と頭注する。小野勝年録文や明徳院版本などは「公文」に作る。
- [5] 鸞索：意義不詳。「鸞」は帝王や賢士および姫妾や朝官などを指すことから、ここは出自の高貴なところを誇示するものであろう。
- [6] 亦：底本は「示」に作るが、諸本にしたがって「亦」とする。

郃以學非內典、况供奉<sup>[1]</sup>藝廣難窮。輒以九九薄能<sup>[2]</sup>、敢紀摩騰之德。所書傳記、未

盡徽猷<sup>[3]</sup>。粗述往返之因事、略陳於<sup>[4]</sup>一二。時承和十四年十一月二日、大唐鄉貢進士樂邵撰上。

【注釈】

- [1] 奉：底本と小野勝年録文は一字脱落している。豪実写本と明德院版本などは二字とも脱け、「供奉」を補う。また底本も「供奉ノ二字歟」と頭注する。
- [2] 九九薄：は諸本とも脱落している。底本は「之情」の二文字を補うが、他本（豪実写本、明德院版本、「天台霞標」本、小野勝年録文）はすべて「能」とする。「九九薄能」とすべし。底本は巻末の余白に「九九薄能<sup>見劉向『說尊賢篇』</sup>」。『漢書』梅福傳曰：『臣聞齊桓之時、有以九九算者。』註師古曰：『九九算者、若今「九章」「五曹」之輩』と書き込んでいる。出典とされる『說苑』（巻八）に「齊桓公設庭燎、為士之欲造見者、期年而士不至。於是、東野鄙人有以九九之術見者。桓公曰：『九九何足以見乎。』鄙人對曰：『臣非以九九為足以見也。臣聞主君設庭燎以待士、期年而士不至。夫士之所以不至者、君天下賢君也。四方之士皆自以論而不及君、故不至也。夫九九薄能耳、而君猶禮之、况賢於九九乎。夫太山不辭壤石、江海不逆小流、所以成大也』」とあり、[漢]韓嬰『韓詩外傳』（巻三）にも同文がみえる。「九九」とは児童の啓蒙に暗記させる「かけ算九九」の類、『孫子算經』によれば、古くは「九九八十一」に始まるそうだ。これは樂の謙遜の辞である。
- [3] 徽猷：精妙や精粹の義、出典は『詩經』にみえる。
- [4] 於：底本に「於字衍文」との頭注があるが、必ずしも衍字であるとは限らない。

〔注〕

真超写本巻末の祝希烈識語に「文政五年秋八月、為超僧正囑、聊正焉馬之誤」とあり、この時点でまだ「豪実」に改名していないことがわかる。

小野勝年「『圓仁三藏供奉入唐請益往返傳記』について」、『東方宗教』第四十号、一九七二年十一月。

「戌」は「戍」の誤り。

「天台霞標」本の慈本跋語にある「文政五年秋八月」の日付は「遊方伝叢書」本に見えない。

小野勝年「『圓仁三藏供奉入唐請益往返傳記』について」、『東方宗教』第四十号、一九七二年十一月。

顧承甫「円仁事跡の最早記載」、『中華文史論叢』、一九八四年第一輯、四十頁。

王勇、王麗萍「唐人樂邵『圓仁三藏供奉入唐請益往返傳記』校録」、『文献』二〇〇四年第四期。